

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 1日現在

機関番号：24302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653084

研究課題名（和文）：

「気になる」子どもたちとともにある「集団づくり」の協働プロジェクト

研究課題名（英文）：A Collaborative Project on the Method of Creating Intimate Relationship with Children who Have Special Needs

研究代表者

服部 敬子 (HATTORI KEIKO)

京都府立大学・公共政策学部・准教授

研究者番号：70324275

研究成果の概要（和文）：

本研究では、「気になる」子の問題で保育に困難を抱えている保育者に対して、集団づくりの方法に依拠した保育実践の提案を行い、研究会での報告を通して定期的に保育場面における支援効果を検討した。その結果、「気になる」子どもたちの興味・関心から遊びを考えて周りを巻き込むという視点がとりわけ重要であり、友達との親密な関係が形成されてくると保育活動への参加や適切な行動が促進されることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

In the present study, external supporters regularly provided feedback to nursery school teachers who feel difficulties in relationship to children with special needs and report their practice, then examined effects of the support provided on early childhood inclusion. The results showed the effectiveness of intervention, creating play based on the interesting of those children who have special needs, and constructing intimate friendship, the children's participation in child care activities was promoted and the children's appropriate behavior increased.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	0	600,000
2010年度	600,000	0	600,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	180,000	1,980,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：「気になる」子、集団づくり、遊び、親密性の形成

1. 研究開始当初の背景

2005年4月に発達障害者支援法が施行されて以降、それまで保育現場で「ちょっと気になる」とみられていた子どもたちは「発達障害」の観点から対応

が工夫されるようになった。この間、「発達障害」児に関する書籍は多数発行されてきたが、そのほとんどは「発達障害」の理解と「個別」対応の方法に重点が置かれたもので、「クラス集団の発

①「基本的信頼感の層」の形成に中心的な課題があるとみられる場合：じゃれつき遊び、触れ合い、簡単なやりとり遊びを、大人との一対一の関係から少人数の子ども同士の関係へと発展させる。

②「ジブンへの期待感」層の形成に中心的な課題があるとみられる場合：「デキル」ことを「自分で」するだけでなく、「あんなこと、あんなふうにしたい」という憧れをもち、「友だちと一緒にならもっと楽しい」という実感をもてること、「デキナイ」とときにはその気持ちを受けとめた上で「後でしょっか」「〇ちゃんとする？」などと条件をつけて返してもらい関係が重要となる。一人ひとりの「自我の座」を確保しながら子ども同士をつなげ、互いを見合い聞き合う機会をつくる、一人のおちこぼしもなく全員があそべるように、ごっこ遊びを班で取り組む、「気になる」子どもたちの「好きなこと」を軸に「楽しいあそび・しごと」を展開し、イメージを共有しながら子どもどうしをつなげていく。

③「仲間の中での存在感」層の形成に中心的な課題があるとみられる場合：上記2つの層を土台として、通常の場合、幼児期後期にかけて「仲間のなかで必要とされ、自分を変えていける」という自己信頼性の層が培われていくと考えられる。この層では、「楽しい」に加えて、「あそび・しごとには必要なルールがある」ことがわかり、役割を分担してやり遂げていくような活動が必要とされる。二人組、グループ、当番、係活動、リーダー活動を3～5歳児クラスで系統立てて取り組んでいく。子どもの生活に密着した謎や問題を発見、探求するなかで、子どもたちが考え、表現し、協働する力を引き出していくプロジェクト活動や、当番活動の中で子どもみずから気づいた矛盾を「話し合い」につなげていく。

(3)提案にもとづく実践の経過報告と形成的評価：意図的な「集団づくり」の働きかけがどのように子どもたちに受けとめられ、子どもたちの変化をもたらしたかについて、保育者からの実践報告と筆者が対象クラスに出向いて行う参加観察記録とをあわせて検討を行った。その時点での「問題」の整理と「次」の具体的な方法について提案を行い、1～2か月に1回のペースで経過を追った。

(4)各年の総括としての公開シンポジウムの開催：この間に得られた資料にもとづいて筆者が「気になる」子どもをめぐるクラスの変化を整理、分析し、実践者とともに公開シンポジウムにおいて報告を行った。参加者との討議とアンケート調査の結果をふまえて各年の総括を行った。

4. 研究成果

(1)実践の報告事例

対象クラスの担任保育者によって実践報告された記録の具体例を示す。

■クラスの概要：保育所4歳児17名（男児8名、女児9名）内、自閉症男児1名、自閉症スペクトラム女児1名 担任2人（前年度3歳児担任、前年度5歳児フリーの保育者）4歳児進級にあたりクラス替えを行った。家庭の事情により情緒が不安定な様子の子もいる。不安定さからか、友だちとトラブルになったり、保育者にスキンシップを求めたり甘える姿がみうけられる。トラブルの時に「おらぁ」「殺すぞ」などきつい言葉や髪の毛の引っ張り合いなど手がでることもある。一方で子ども達が仲裁に入ったりする姿も多くなっている。朝の会などでは自分の意見を活発に言う。しかし反対に人の話を聞けないこともあり、クラスの課題としている。

■対象児の概要：H児（男児）。やりたいたいことができなかつた時など自分の思いを強く突き通そうとする。大きな声で相手に押し付けようとする。他児が遊びに「よせて」と来ても、「あかん」と拒否することが多々ある。みんなで話をする時、輪に入るまでに時間がかかり他児を待たせることがある。保育者に何度も声を掛けられてもなかなか来ないこともある。友だちが自分の思いと違うことをした時などに、荒い言葉づかい、手が出る、睨みつけるなどが見られる。夏頃までゴミ箱におしっこをしたり、トイレの床を水浸しにしたりと、保育者から見れば「困った行動」が見られた。「困った行動」をして、保育者がどのように自分に向き合ってくるのか試している様子であった。夢中になると一つのことを集中して遊べるが、興味があるものが見当たらないと部屋をウロウロし、出ていってしまうこともある。

■研究会での論点・実践への提案：トラブル時や指示を出す時に、H児

は大声で反発したり、睨みつけたりして、あまり耳に入っていなかった。その度に保育者の言い方が悪かったから聞いてくれないのかと考えており、H児と保育者の信頼関係はどうなのかということに保育者は考えが及んでいなかった。

1)まずはH児の思いをしっかり受けとめる。2)一緒に遊ぶなど楽しさを共有する時間を多くとる。3)「いつも見ているよ」という保育者の思いを声掛けや視線も交えながら伝える。4)どんな「困った行動」が起きててもまずは「どうしたん?」と尋ねることから始める。5)集団での楽しさを感じられる機会を多くとる。という5つを意識し保育をすすめることとした。

■実践の経過:

徐々にH児の反発する姿が減り、反発しても最後はこちらの話を受け入れてくれることが増えた。H児の方から「一緒に遊ぼう」と来てくれるようになり、他児とのトラブル時でも素直に保育者の話を聞いてくれることもずいぶん増えた。

<エピソード記録>

①午睡時にH児は「トイレ行って来る」、「お茶飲みたい」などの用事を作って午睡室から出て行く。これまで保育者は自閉症児Iくんを優先し、I児が午睡に来たらH児には「待っててね」とすぐI児についていた。そこで、他の4歳児クラスの担任にI児のそばについてもらい、保育者はH児が眠るまで横についた。H児に「Hくんが寝るまで先生がトントンするしな。」と言うと、H児は「じゃ、約束。約束げんまんしよ」と言い、その後15分で眠りについた。翌日から同じようにするとH児は保育者が横についている間に眠るようになった。

②H児を含めた数人の子と家族ごっこをしていた。H児はお兄ちゃんに保育者はおばあちゃんに立候補した。H児が料理を作ったり、私が買い物に出掛けたりしてごっこ遊びを楽しんだ。お片付けの時間になると、H児は片付けをせずに部屋の中をうろうろし始めた。保育者はH児に「一緒に片付けよ」と何度も伝えたが、ある程度片付け終わってもH児が来なかったの、H児の方へ行き「お兄ちゃん、これ片付けましょうか」とおばあちゃんになって声を掛けてみた。するとバラバラになったパズルをさっと組み片づけ始めた。

それ以降、H児は保育者に会うと「おばあちゃん」と抱きつき、保育者の姿が見当たらないと「おばあちゃんいない…」と探す姿が見られた。

(2)追跡した実践からの示唆

朝の集まりでの対話、ごっこ遊びやルールのある遊びの取り組みに焦点をあて、導入時から発展過程における子どもの様子を観察し、とくに、状況の理解が困難な子どもの場合にどのような混乱が見られるか、どのような工夫が有用であるかを検討するとともに、親密性の形成とグループ活動(メンバー決め・話し合い)過程の検討を中心に行った。その結果、明らかになったことを以下にまとめる。

①3歳児クラスでは、保育者の「注意の言葉かけ」への反応や行動改善が乏しく、他の子どもへの乱暴な行為が、4歳児クラスでは、イメージやルールを共有して遊ぶことが難しく孤立しがちなこと、相手の気持ちを考えられないことなどが「気になる」理由として多くあげられることがわかった。

②保育観察を通じて明らかになったのは、何らかの「障害」が明確な子どもの「問題」行動に対しては比較的丁寧な受け止めがされやすいが、「気になる」子どもの場合、同じ行動をしても厳しい叱責を受けることが多く、友達からも否定的な評価をされやすいことであった。

③新規対象クラスの実践記録では、「気になる」子どもの否定的な姿のみに着目され、保育者からの否定的な言葉かけが多いが、前年度から継続しているクラスの実践記録では、「気になる」子どものプラス面への着眼や「受けとめる」言葉が多くなり、「子どもとの信頼関係が築けてきた」と実感できていることが重要な変化であった。よくない行動に対して、「～してはダメ!」「○○しないとダメでしょ」と注意・叱責して終わるのではなく、「本当は○○したかったんだね。○○するほうがよかったね」と、望ましい行動に言及して肯定形で受け止めることがきわめて有効である。

④4歳児の発見や驚きを引き出すような体験、やりながら「矛盾」に気づいていくことを大事にする指導、「技」(時間をかけて上達する活動)への挑戦過程における見合い、教え合いの場の設定などが対話的な関係を創出する上で重要であることがわかった。なかでも、「気になる」子どもが好きなのをベースとしたごっこ遊び、及び、わかりやすいルールのある遊びがしかけられた結果、とく

様式 C - 19

に4歳児クラスでは「わかりやすいルール」に変更することで「気になる」姿が落ち着いた、との報告が相次いだ。5歳児クラスでは、「技」を高めていくような遊びによって教えあいや励ましあい、認め合いが生起し、そのことが友達関係を深化させ乱暴な関わりが減る。

⑤ 4、5歳児クラスになると、保育者の個別の受け止めに加えて、話し合いの場で友達から行動改善を求められたり評価されたりすることがきわめて有効である。

⑥ 保育者の悩みで多く共通したのは、「気になる」子どもが互いに関わりたがりトラブルが頻発・増幅することであった。トラブルが頻発する「気になる」子どもを遠ざけるよりもむしろ、親密性が高まるように、遊びを媒介する環境を工夫することが重要である。友だちとの対話的な関係が成り立ちにくい（指導が難しい）子どもの場合も、親密な友だち関係形成過程において「見る」「聞く」ニーズが増大し、自己調整にもとづく対話的な関係が成立していく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計2件）

服部敬子 「指導が難しい」子どもとともにある集団づくり（全国保育問題研究協議会編『困難をかかえる子どもに寄り添い共に育ち合う保育』第2部1）76-86，新読書社，2011

服部敬子 「指導が難しい」子と「集団づくり」（渡邊保博・浅井春夫編『保育の理論と実践講座 第2巻 保育の質と保育内容—保育の専門性とは何か』第3節）71-82，新日本出版，2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

服部 敬子 (HATTORI KEIKO)
京都府立大学・公共政策学部・准教授
研究者番号：70324275

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし